

奉仕に根ざして、 目的に導かれて

ウォール街で鍛えられ、企業法務の世界で磨かれた若き日のキャリアを通じて、ライオンは任された仕事に対する責任感と、常に最高の結果を出す姿勢を身につけた。中でも敬愛する上司の一人、ルーから学んだ教えは、今でも人生の指針となっている。「上司が自分の名義で世に出すことをためらうような仕事はするな」

ライオンはまた、より大きな変化を起こそうと地方政治にも関わるようになった。仕事も私生活も順風満帆だったはずの彼だが、1996年、昔の同級生とゴルフをしている時に、何かが足りないことに気づく。

ブルックフィールド・ライオンズクラブの新任クラブ会長とラウンドを回る中で、ライオンズクラブという団体への関心が芽生えた。後日クラブの例会をのぞくと、あることに気づいた。部屋にいるほぼ全員が、地方行政の時代からの顔見知りだったのだ。



— “ —
ルーツは大切。
同時にどう成長して
いくのかも重要です。
— ” —

「でも誰も政治の話なんてしていなかった」と彼は振り返る。「そこでは皆、クラブの活動について話し合う普通のライオンズでした。耳を傾けながら、思いました。『ここが私のいるべき場所だ』と。それで、すぐに入会したんです」。これはライオンが好んで語るエピソードであり、30年に及ぶ彼の奉仕の歩みの始まりを告げる瞬間でもあった。

ライオンにとって奉仕とは、ライオンズという国際的組織の礎であり、規模の大小は関係ない。「ネブラスカ州で缶詰を集める事業も、インドで病院を建設する事業も、同じように重要です」と彼は言う。「大きすぎる奉仕事業も、小さすぎる奉仕事業もありません」

国際会長の立場になっても、マーク・ライオンは故郷とのつながりを失っていない。今も伝統に敬意を払い、信念と楽観主義に立っている。そしてすばらしい「物語」を大切にしている。物語には教訓だけでなく、人を動かす力があるからだ。

彼がコネチカット州の「チャーター・オーク」を愛してやまない理由がここにある。1687年、入植者たちは自治の権利を守るため、コネチカットの勅許状（チャーター）をオークの巨樹の中に隠した。それ以来、チャーター・オークは自由の象徴となった。大木は1856年に倒れたが、忍耐と不屈の精神のシンボルとして、今も人々の心に残り続けている。

「チャーター・オークは、ルーツが大事であること、それと同時に、これからどう成長していくかも同じくらい重要であることを私たちに教えてくれます」とライオンは語る。この象徴的な木が、私たちが何者であり、なぜ世界にとってのシンボルであるのかを物語っている — そうライオンは信じている。

ライオンズのルーツは深く根ざしている。そして私たちが奉仕する世界に多くを与え、同時に、この世界と深く結びついている。ライオンは、私たちが奉仕に根ざし続けることで、世界をより良い場所にできると信じている。